

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	カザンザキス作品における伊東ハンニと川島芳子 : カザンザキス思想・文学上での役割を中心に
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア , 28 : 8 - 24
Issue Date	2022-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053431
Right	Copyright (c) 2022 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



カザンザキス作品における伊東ハンニと川島芳子

——カザンザキス思想・文学上での役割を中心に——

福田 耕佑

京都大学文学部非常勤講師

1. はじめに

本稿は、ニコス・カザンザキスの「日本旅行記」¹と小説『石庭』に現れる、伊東ハンニ(1898-1969)と川島芳子(1906-1948)という戦間期日中関係の中で日本のマス・メディアで大きく取り上げられた二人の人物を取り上げ、彼らがカザンザキス作品の中で思想及び文学上で一定の役割を担わされていることを明らかにする。作中における伊東と川島の表象と役割の分析を通し、二名が単に作中の異国情緒の雰囲気醸成という些細で瑣末な役割を担わされているだけでなく、実際にカザンザキスの思想に則する形で描き直された上で彼の思想を表現する装置として機能していることを論じる。この分析によって、カザンザキスの日本旅行が単なる異文化交流や「物見遊山」に尽きるものでないことの一つの証左を提供する。

まず第二章で伊東ハンニと川島芳子の伝記的情報について概説する。続く第三章でカザンザキス作品における伊東ハンニ表象、次いで第四章で川島芳子、或いはヨシロ表象について詳述する。尚、カザンザキスの極東滞在期における動向は福田(2020)及び村田(2022)を参照されたい。

2. 伊東ハンニと川島芳子

本章では伊東と川島の伝記事項について概説する。本稿ではとりわけ、伊

¹ 「日本旅行記」と記述しているが、本来は『日本と中国を旅して』という日本部と中国部の二部からなる書籍である。本稿では便宜的に『日本と中国を旅して』の日本部から引用する際には『日本と中国を旅して』ではなく「日本旅行記」と呼称する。

東と川島の二人が接触を持った年代であり、またカザンザキスが日本を訪れた1930年代前半から中葉にかけての事跡を中心に扱う。

2-1. 伊東ハンニ (1898-1969)

伊東と同時代の中国や大陸に関して著述した思想家に関する研究には、井上寿一による『【増補】アジア主義を問いなおす』(2016)や嵯峨隆の『アジア主義全史』(2020)、そして岩崎育夫による『近代アジアの啓蒙主義』(2021)等が存在する。これらの先行研究において頭山満など伊東のアジアや東洋観に影響を与えた思想家たちが詳細に論じられている。しかし、これらにおいては伊東の「新東洋主義」や他の思想に関する言及は見られず、伊東についての思想面での研究は十分に行われていないことが伺われる。本稿では、このような先行研究の状況の中でも伊東を主題の中心として扱った河西(2003)の『昭和の天一坊 伊東ハンニ伝』という自伝的研究に基づき伊東を論じる。

カザンザキスの「日本旅行記」において、伊東ハンニの名はギリシア語で Χάννι Τρο と記され、最終章「日本に別れを告げて」で「新東洋主義」(Νέος Ανατολισμός)を唱えた人物として直接言及される²。

伊東ハンニは1898年三重県に松尾正直 という名前で生まれ、名古屋で育った³。大学等で学問的な専門教育を受けることはなかったが、東京でシュタイナー研究や西洋占星術の研究で知られる隈本有尚と個人的な関係を持ち彼に師事した。苦学の中で第一次世界大戦期には作家として活動するも最終的に大きな成果を得られず、1925年には詐欺公正証書不実記載で逮捕され、病気を理由に釈放されるがそのまま逃亡するという、波乱に満ちた生活を送っていた⁴。

1926年の夏に再び東京に戻って再度隈本のもとに寄宿することになり、この時に名を伊東ハンニとした⁵。伊東の名が広く知れ渡るきっかけとなったのは、1931年に隈本の占星術に基づき世界恐慌を予測し、相場師として巨万の富を築き、一万円を満洲派遣軍の慰問費として寄付したことであった。この時の寄付が報知新聞と国民新聞で報じられたことがきっかけとなって日本のマス・メディアに登場することとなった⁶。

² Καζαντζάκης (2006 : 153)

³ 河西 (2003 : 8)

⁴ 河西 (2003 : 91)

⁵ 河西 (2003 : 92)

⁶ 河西 (2003 : 110 - 111)

相場師として得た財産をもとに、1932年には帝国ホテル内を事務所として雑誌「日本国民」を創刊し、共産主義とファシズムに対峙する「日本国民主義」を称え、シュタイナーの友愛理念を基調としながら労働の価値に重きを置く主張を展開した⁷。尚、この出来事は『『新雑誌創刊へ百万円用意』『日本国民』の出版社伊東氏株会を去り、未知の事業を始める』として1932年6月5日付で米国のニューヨーク・タイムズでも報じられている⁸。更に同年、徳富蘇峰ゆかりの「国民新聞社」を買収しその社長に就任する。しかしわずか数カ月の内に両新聞とも資金繰りに失敗して廃刊することとなり、伊東はこれらを放棄して大陸遊説へと向かうことになった⁹。

1934年に大陸から帰国し、同年1月15日には大阪朝日新聞にて、カザンザキスも「日本旅行記」で言及することになる「新東洋主義論」を発表した¹⁰。この「新東洋主義論」の思想内容は「日本国民主義」の内容と合わせて本稿の次章で詳述するが、主張内容自体は前年の大陸遊説中に北京の日本大使館武官室で発表していたものであり、ここには次節で述べる川島芳子が同席していた。伊東はこの年の4月にビクターレコードから歌を出し、東京九段で川島芳子と同棲しつつ国内遊説を繰り返し、夜な夜な自分の曲である「オシャカサン」でダンスをしていることが報じられるなど、「この時代のハンニはまるでポップスターで、思想芸能人であった」と評される¹¹。

カザンザキスが日本を訪れた1935年も川島芳子と共に国内遊説に従事したが、同年10月には詐欺容疑で逮捕されることになった¹²。残りの生涯に関しては、経済的には様々な出来事があったが、「新東洋主義論」等の思想を深めた形跡は見られず、1969年に没した。

カザンザキスが来日した1935年3月から4月以前より伊東ハンニと「新東洋主義論」は当時の日本において有名であったばかりか、彼の名も米国で報じられており、日本についてギリシアの新聞で記事を書くために様々な日本を調査していたカザンザキスが知っていたとしても自然なことであっただろう。

⁷ 河西 (2003 : 116 - 117)

⁸ 河西 (2003 : 123 - 124)

⁹ 河西 (2003 : 165 - 166)

¹⁰ 河西 (2003 : 168)

¹¹ 河西 (2003 : 180 - 181, 187, 198)

¹² 河西 (2003 : 212)

2-2. 川島芳子 (1906 -1948)

川島に関する先行研究として、直接川島を取り上げたものに寺尾紗穂による『評伝 川島芳子 男装のエトランゼ』(2008)、また川島への言及もある川崎賢子の『もう一人の彼女 李香蘭/山口淑子/シャーリー・ヤマグチ』(2019)が挙げられる。本稿ではこれら川島についての研究及び口述筆記によって 1940 年に出版された自叙伝『動乱の蔭に 私の半生記』も参考にしつつ川島の伝記事項を簡潔に記述する。

伊東ハンニと異なり、川島の名はカザンザキス作品において直接言及されることはなかったが、第四章で後述するように、主要登場人物ヨシロ(Joshiro)に投影される形でフランス語小説『石庭』の中に登場する¹³。

川島芳子は本名を愛新覺羅ケンシ¹⁴、中国名を金璧輝(字を東珍)として、斜陽にあった清朝第十代肅親王善耆の第十四王女として生を受けた。彼女が八歳の時、実父肅親王の友人であった大陸浪人の川島浪速の養女になり、名を川島芳子として日本で生活することとなった¹⁵。

清朝の王女という出自をもって大衆の注目を集めたが、十七歳の年での恋愛騒動の果てにピストル自殺未遂事件を起こし、その後に断髪を経て男装を始めたことで更に大きな注目を集めることになり、これは 1925 年 11 月 27 日『朝日新聞』で記事になった¹⁶。

「女を捨てた」という決意文書を発表して断髪及び男装を経た後、1927 年にモンゴル族のパプチャップの息子であるカンジュルジャップと結婚するが、1930 年に離婚し日本に帰国した¹⁷。離婚後に兄の憲立より二千元を持ち出して上海に渡った。第四章において後述するが、この時期にフィクションやマス・メディアで「男装の麗人」や「東洋のジャンヌ・ダルク」、また「東洋のマハ・タリ」と称されるように大陸での諜報活動に携わったとされている¹⁸。実際、1931 年 9 月に発生した満洲事変の後、11 月には愛新覺羅溥儀の皇后である婉容を関東軍の依頼で天津から旅順へ護送する任務に従事したり、1933 年 2 月に関東軍が熱河省進出のために組織した熱河自警団の総司令に就任したりし

¹³ Kazantzaki (1959 : 3)

¹⁴ 漢字での表記は「顯玗」である。

¹⁵ 寺尾 (2008 : 10 - 11)

¹⁶ 寺尾 (2008 : 81 - 83)

¹⁷ 寺尾 (2008 : 143, 145)

¹⁸ 寺尾 (2008 : 146)

たが、これらは全て日本の新聞で報じられた¹⁹。1933年4月には川島を描いた小説『男装の麗人』が刊行され、1934年3月には舞台「男装の麗人」として上演された²⁰。他にも、ラジオ番組に出演したり、レコードや手記の発表を行っていただけでなく、前節で見たように1934年及び35年は有名人であった伊東ハンニと同棲したり日本各地で講演したりした。後に大陸に移って活動し、第二次世界大戦後に中国国民党軍に逮捕され、漢奸として1947年10月に死刑判決を受けることとなった。

ここまで見てきたように、川島芳子は自身の出自と派手な行動によりマス・メディアやフィクションによって著名人となり、また伊東ハンニとも密接な関係を持っており、カザンザキスが日本を訪れるまでにメディアによって実像と虚像を相交えた形で彼女について情報を得ていた可能性は高い。

3. カザンザキス作品における伊東ハンニ

本章では、「日本旅行記」において言及される伊東とその「新東洋主義」について論じるため、まず同書において両者がどのように言及されるのかを確認する。次いで、伊東自身が「新東洋主義」を如何なるものとして理解していたのかを、先行研究に基づいて論じる。その上で、カザンザキスが理解した伊東の「新東洋主義」が彼の思想の中でどのように位置づけられるのかを論じたい。

3-1. カザンザキスの古代ギリシア像の基礎的特徴

まず「日本旅行記」における伊東と「新東洋主義」が言及される箇所を引用する。尚、下線部は筆者自身による。

若き日本の預言者たる伊東ハンニ【Χάννι Τρο】の声に耳を傾けよう。大胆に自我を語りつつ暗に自民族全体を語っているが故に、私はこの若者を気に入っている。無邪気さと若さ、そして「新東洋主義」【Νέος Ανατολισμός】という福音を有する預言的な傲慢さがよい。彼の発言は、今日的な危機、上へと向かう日本の勢いの、未だ混迷とした瞬間を照らしているが故に貴重である。

「新東洋主義とは何か？ 私たちは東洋の復活を信じている。西洋文明は、

¹⁹ 寺尾 (2008 : 148 - 150, 158 - 160)

²⁰ 寺尾 (2008 : 114, 124)

資本主義の潮流が地上の質的な徳を蹂躪してしまったことで明らかに示されるように、腐敗して中身が空っぽである。東洋文明は太平洋よりも深いのだ。だが、未だ若き青春の時期にある。しかし、待ちに待った日が到来し、東洋の華は開花し始めたのだ。生の新しい全世界的なあり方は、中国大陸で花開き始めることになるのだ。友愛の華が日本の漁師と中国の農民の間で開花するはずだ。東洋の偉大な両兄弟は立ち上がって手と手を取って前進しなければならない！」

「労働者が自分の産物を享受できるように、私たちが東洋に物質文明を建てようではないか。私たちの生を喜ばしいものにする限りにおいて、資本主義を活用しよう。食料が山のように積み上げられているのに、何千という人々が飢餓で死んでいく国々は、何と恐ろしいことだろう！私たちがこの世界から貧困と悲惨を追い払おう。精神が肉体の中にあるように、喜びも物質の中にあるのだ。【中略】生産したものを皆に分配しよう。これが新東洋主義の希望だ。」

「聞け、日本人よ！日本は中国の救世主となりうるのだ。同じく中国が日本を救うだろう。民衆ではない顧客としての中国が我々の関心を引いているのではない、と言うだけでは不正確だ。中国は古よりの偉大な民衆であるが、真に若く、その土壌は手つかずである。マルクス主義の中国ではない。ファシズムでもない。帝国主義でもない。植民地でもない。手つかずなのだ。その使命は日本の使命と一つである。もし日本が次の世界大戦で白人どもに敗北すれば、東洋全体が暗闇の中に置かれることになるだろう²¹。」

カザンザキス作品における伊東及び「新東洋主義」に対する言及は以上の引用に見られるのみである。次節では先行研究に基づき、実際に伊東が「新東洋主義」でもって何を理解していたのかを確認しよう。

3-2. 伊東ハンニの思想

本節では、伊東の「新東洋主義」の内容を先行研究に基づいて概説すると共

²¹ Καζαντζάκης (2006 :153 - 154): 『石庭』の三十五章においてもクゲ・ナカモトの口を通し、文明の使命が東洋に巡ってきたことと、日本だけが中国を救うことができ、不動の中心である中国だけが日本を救うことができると記述している。しかし中国人のリ=テは、日本は中国をパイのように愛しているだけだ、とこのクゲ・ナカモトの言葉を否定している(Kazantzaki 1959 : 240 - 239)。

に、「新東洋主義」に先行する「日本国民主義」についても簡潔に述べる。

3-2-1 伊東ハンニの「日本国民主義」

本項では、「新東洋主義」に先行する「日本国民主義」について確認する。

この「日本国民主義」が初めて登場するのは、前節で確認した 1932 年に相場師として獲得した資金を用いて創刊した雑誌「日本国民」においてである。伊東自身は「日本国民主義」をマルクス主義でもファシズムでもない自身の独特な思想だとしつつ「ハンニズム」とルビを振っており、様々な雑誌や新聞、また講演会を通して積極的に宣伝活動に努めるなど、彼が自身の思想にどれほど強く打ち込んでいたかが伺われる²²。尚、ここでの「国民」という言葉は、大和魂など国粹主義的な意味合いでの「人種主義」や「民族主義」というニュアンスを含むものではなく、伊東の師である隈本が傾倒したシュタイナーの「民族【Volk】の使命」に影響を受けたものである²³。

河西(2003)の研究によると、伊東の「日本国民主義」には「国民」という名称が付されている通り民族主義的な色彩が強いものであるが、実際のところ思想的な面で伊東の独創性はなかった。とはいえ欧米に対する排外主義的な態度は有さず、創刊記念演説ではガンジーの活動を引き合いに出して批判しつつ、時代の潮流であった反欧米的アジア主義に立脚しないことを明言するなど、他民族排外主義的な色彩を最大限に抑えたものであった²⁴。伊東は自身の「日本国民主義」を、彼が買収した徳富蘇峰に起源を持つ「国民新聞社」の精神にもよく合致するものと理解し、1932 年 7 月 19 日の新聞改革においては「太平洋よ、大陸よ。世界の運命は日本国民の手にあり」というスローガンを掲げた。しかし、伊東が日本国粹主義を掲げながらも天皇崇拜を口にしなかったことに加え、彼の「日本国民主義」が大和魂でも国粹主義でもないと言ったことによって右翼や国粹主義者たちの逆鱗に触れることになり、後の失脚につながる事となった²⁵。

排外主義的に陥ることなく「国民」に立脚した点に加え、「資本」の在り方に対して唱えた批判も、「日本国民主義」の大きな特徴の一つである。伊東は資本主義において、搾取が横行し「資本は変質してしまった」と述べた。実際

²² 河西 (2003 : 114, 129)

²³ 河西 (2003 : 116)

²⁴ 河西 (2003 : 120)

²⁵ 河西 (2003 : 140, 143)

のところ伊東の資本や経済に関する思想はシュタイナーの『社会問題の核心』の第三章「資本と労働」に基づいているだけであったが、この考えに基づき伊東は積極的に講演会と宣伝活動を行っていく²⁶。「農村、都市小市民を救え」というスローガンのもと1932年7月6日の第七回日本国民大演説会では、農村や都市小市民の置かれた経済的窮状を憂うと共に、ここでの演説には伊東ハンニの関心が日本一国を越えて東洋全体の窮状へと移った痕跡が見られた²⁷。

農村や都市小市民の置かれた経済的窮状への関心と日本一国を越えて東洋全体の窮状へと関心が移っていったことは、7月10日に群馬県高崎市で行われた非常時農村匡救緊急対策大演説会で更に色濃く見られ、上述の第七回大会の演説を受けて次のように発言した。

今にして東洋民族の蹶起を促さなければ全東洋民族は白人のドレイになり終わらなければならぬ。まず日本は満洲国の基礎を確立安定させた後、支那四百余州に手を伸ばして指導開発するのが使命だ。続いてインドのために起たなければならない。こうして全東洋民族の固き提携成って、東洋文化の隆盛に向かう暁こそ、日本は全世界に先駆し世界の不況打開の方途を支持するものである²⁸。

資本を介在にした経済観を内に含み、自身の名を冠し「ハンニズム」とルビをふる程に身を捧げた「日本国民主義」であったが、同年3月1日に建国が宣言された満洲国成立という背景の中で棄却され、日本の枠を越えつつも日本を中心に構想される「新東洋主義」へと展開していくことになる。

3-2-2. 伊東ハンニの「新東洋主義」

伊東ハンニの「新東洋主義」がメディアにおいて登場する契機となったのは、1933年2月29日に掲載された東京日日新聞の第二面の全面広告においてであ

²⁶ 河西 (2003 : 129 - 130)

²⁷ 河西 (2003 : 156 - 157)

²⁸ 河西 (2003 : 158); なおここで採択された要望の内訳は次の通りである: ①中小商工業者および農村のモラトリアム。②高配当会社および大資本家に非常時課税。③小学校教員俸給全額国庫負担。④他財政整理。⑤満洲国即時承認。

り²⁹、3月12日には大阪毎日新聞において「新東洋の建設」と「東半球主義」に「ハンニズム」のルビをもって掲載された³⁰。本来この「新東洋主義」の内容は「日本国民主義」として発表されるべきものであったが³¹、「日本国民主義」が言及されなくなった代わりに、この「新東洋主義」が彼の中心的な思想として喧伝されていくことになる。

日本が中心的な役割を果たしていくことは「新東洋主義」においてもかわりないが、前項で見たように関心の中心は日本一国から大陸・東洋を含むものに移っていった。この「新東洋主義」もシュタイナー文明移転説の影響を受けたものであり、伊東は西洋文明に対し、文明は東洋で生じてヨーロッパへと移転していったが、アメリカに到達した時には神経喪失の過程でまったく物質化してしまっているのだと批判している。そうして移転はアメリカから太平洋を越えて日本にまで達し、これを通して日本に歴史的な使命があることを論じるとともに、「太平洋の底から、とうとう文明を新しい大陸に引き上げたのはハンニである」と主張した³²。

伊東によると、新しい文明を担うべき民族としての日本の使命は、東洋の人民を欧米の支配から脱せしめて東洋を救うことである。そして欧米から解放されることにより、苦しむ東洋の民衆は帝国主義や資本主義から解放され、自分の生産物を自分で享受できるようになる。伊東は、この目的を達成するための最適な手段として満洲国をみなしていたのだった³³。日本の援助下で成立した満洲国を通して日本が西洋からの東洋の解放を達成するという発想は川島芳子との接触や大陸遊説の影響によって形成されたものだと考えられる³⁴。しかしこの「新東洋主義」も「日本国民主義」と同様に、1934年1月に刊行された雑

²⁹ 河西 (2003 : 170)

³⁰ 河西 (2003 : 182)

³¹ 河西 (2003 : 170)

³² 河西 (2003 : 174 - 175): シュタイナーは文明移転説において中央ヨーロッパが胸であって西欧が頭だと論じたが、西欧や中欧、またアメリカとの区別に重要性を見出すことが出来なかったハンニは、これを西洋が頭部、東洋を胸部として理解したのであった(河西 2003 : 176 - 177)。

³³ 河西 (2003 : 174 - 175): 「日本国民主義」において「変質資本」や「資本の再生」が説かれていたが、「新東洋主義」では「紙幣は伝票である」、「生産資本主義」と名を変えて論じられる。ただし、河西によるとこの「金は伝票である」もシュタイナーからそのまま採用したものである(河西 2003 : 177 - 178)。

³⁴ 河西 (2003 : 170)

誌「新東洋」のような欧米への単純な反発としての東洋主義ではなく、伊東なりの文明論と日本・大陸論、そして経済論を含んでいるという点は重要である³⁵。

3.3. カザンザキスの「故郷嫌悪」と「脱西欧」、そして「新東洋主義」

本稿第三章第一節と第二節を通して、カザンザキスの理解した伊東の「新東洋主義」と先行研究を通して確認した伊東の「日本国民主義」から発展した「新東洋主義」を確認したが、本節では、伊東の「新東洋主義」の中でカザンザキスがどの点を重要視し、またこれをどのように自分自身の思想の中に位置づけたかを確認したい。

伊東の「新東洋主義」の重要な点としてカザンザキスが「日本旅行記」の中で記述した点は次の三点にまとめられる。一点目に、欧米型の資本主義の腐敗を糾弾する姿勢であり、二点目に民衆が自分たちの生産物を自分たちの手で享受できることを目指すという経済的視点、そして三点目に歴史的な使命を負った日本が中国を助け、その上で上記の経済的な側面を達成しようという点である。

上述の一点目に関しては福田(2021)で見たように、日本を訪れる以前にカザンザキスはバツイスが指摘した「故郷嫌悪」及び「脱西欧」の思想を抱いており、伊東の「新東洋主義」で説かれた西欧に対抗するという姿勢、或いは西欧の道や方法とは異なるものを求めようとする姿勢に共感したことは蓋然性が高い³⁶。西欧との関係に関してカザンザキスは、ロシアと日本を比較する形で、両者とも西欧を追い越すために重工業化を急いだ点、そして「メシア的で全人類的な使命」、つまり彼に言わせるとアジアを征服する、或いは解放することを使命とする点が共通しているのだと記述しており³⁷、西欧への対抗とアジアの解放は表裏一体に結び付けられている。

二点目に関して、1930年に執筆された『トダ・ラバ』の「東方会議」に見られるように、帝国主義や資本主義による東方世界や第三世界に対する搾取への憤りと、1920年代に社会主義や共産主義の思想に共鳴していたことに窺われるように、東方世界或いは第三世界が自身の生産物を自身で享受できるとい

³⁵ 河西 (2003 : 172)

³⁶ 福田 (2021 : 2 - 3)

³⁷ Καζαντζάκης (2006 :153 - 154) : 尚、ロシアがいかにしてメシア的な使命をユダヤ人の影響によって得たのかについては福田(2019 : 15)を参照。

うことに強く共感していた³⁸。

最後に上述の三点目、特に日本が中国或いは大陸に負っている使命との関係に関して、カザンザキスは「日本旅行記」において伊藤の言葉として「聞け、日本人よ！日本は中国の救世主となりうるのだ。同じく中国が日本を救うだろう。民衆ではない顧客としての中国が我々の関心を引いているのではない、と言うだけでは不正確だ」と記述しており、これは一点目に見た欧米の東洋支配や資本主義による搾取に対する反感に由来する帰結であるのみならず、『禁欲』における「私が神を救えば神が私を救ってくれる」に見られる「他者を救済することで自己の救済が達成される」という定式に合致するものである。

ここまで見たように、カザンザキスの理解した「新東洋主義」は伊東ハンニの「新東洋主義」を自身の思想に合わせる形で引用したものであり、且つ日本を訪れた当時のカザンザキスの思想に合致するものであった。

4. 川島芳子のカザンザキス作品での登場

本章では、川島芳子の痕跡が主に小説『石庭』のヨシロの形を通して現れることを論じる。

4-1. 『石庭』におけるヨシロ表象

本節では『石庭』に登場するヨシロの表象について論じていく。

作中においてヨシロが初めて登場するのは、第一章におけるエジプトを出発して日本に向かう船の甲板においてである³⁹。ここでの雰囲気は融和的なものではなく、日本と欧米の戦いも辞さないといった会話も繰り広げられ、主要な本作の登場人物であることが仄めかされる⁴⁰。

続いて第三章において主人公たちを乗せた船は神戸に寄港し、ここでヨシロが神戸の街を少々案内した後別れることになる。ここでの別れ以降ヨシロは日本部において登場せず、部隊が中国に移った第十六章において、台詞は無いが再び上海で登場することになる。初め彼女は上海の賭け事やダンスの行われている大きなビルの一室で歌っているところを主人公によって目撃されるのだが⁴¹、第三十六章と第三十九章において大陸でスパイとして諜報活動に従事し

³⁸ Kazantzaki (1962 : 187 - 189)

³⁹ Kazantzaki (1959 : 4)

⁴⁰ Kazantzaki (1959 : 15 - 16, 23 - 24)

⁴¹ Kazantzaki (1959 : 112 - 113)

ていることが明らかにされる⁴²。主人公と神戸で分かれた後、『石庭』において第十六章を除いて直接ヨシロが登場することはなく、専ら登場人物たちの回想と会話の中での言及において登場する。ここまで見たようにヨシロが上海の社交界で踊ったり歌ったりしながら諜報活動に従事している様子、第三十六章で国民党に捕縛され、後の第三十九章でリ＝テの妹シウ＝ランがヨシロを死刑に処すという命令を伝えに行くシーンが描かれるなど⁴³、物語の終盤まで進行中の場面における台詞無しの登場でありながら、物語の進行の中で中心的な役割を担わされている。

ヨシロの人物描写に関して大きく三点の特徴を指摘したい。まず一点目に、作中ヨシロは「男になりたい」という台詞を口にするとともに⁴⁴、外国人が日本の女性に抱くステレオ・タイプ或いはオリエンタリズム的な形象をたとえば「あなたたち観光客には、私たちが旧き家というものの中でどれほど苦しんだことか、想像もつかないでしょうね」や「もうたくさん！ 異国情緒の謝肉祭——着物、桜、茶会、感傷的な俳諧——は終わらせる時よ」として強く否定する⁴⁵。ここでの「男になりたい」或いは日本人女性のステレオ・タイプに関する否定は、作中「旧き善き日本」や伝統を否定して工業化と近代化を成し遂げて欧米社会に対抗する日本を作り上げていこうという、カザンザキスのロシアや日本のメシア的理解に沿った基本線の下で描写される。

二点目は、先述の通り彼女が上海でスパイとして国民党將軍に接触し情報を盗む活動に従事したことと、また彼女が上海の社交場やダンスホールで踊りあかしていたという点である。上海の社交場やダンスホールで踊りあかしていたことについては、実妹の愛新覚羅顯琦が自身の伝記で芳子が彼女をダンスホールに夜な夜な連れて行っていたことを証言している⁴⁶。

そして三点目に、中国の独立と日本を含む外国勢力の駆逐のために国民党に与して戦っている「ヨシロとリ＝テの恋」が挙げられる。先述の通り、作中スパイ活動に従事していたヨシロは国民党に捕縛され、かつては恋愛関係にあったリ＝テによってヨシロの死刑が実行されることになり、ヨシロの死刑を巡って主人公とリ＝テは決別することになり、失意に沈んだまま主人公は極東に見

⁴² Kazantzaki (1959 : 250 - 251, 273, 276)

⁴³ Kazantzaki (1959 : 275)

⁴⁴ Kazantzaki (1959 : 24)

⁴⁵ Kazantzaki (1959 : 21)

⁴⁶ 愛新覚羅 (2009 : 43 - 44)

切りをつけヨーロッパに帰っていくことになるなど⁴⁷、作品のプロットの進行に大きな影響を与えている。このように、ヨシロは序盤以降直接的な登場はなくなるにもかかわらず、作品の最後までプロットに関わるだけでなく登場人物たちの心情と行動に影響を及ぼし続けるなど、重要な役割を担わされている。

4-2. ヨシロと芳子

本節では実在の人物である川島芳子とカザンザキスが創作を通して産み出したヨシロという人物の比較を行いたい。

何よりもまず、川島の「ヨシコ」という名前と『石庭』の「ヨシロ」という名前の音の近似を指摘しておきたい。ただ、『石庭』以外にも「日本旅行記」の「東京」の章に「ヨシロ」【Ιοσιρό】という、名前は同じであるが人格としては『石庭』の「ヨシロ」と異なる人物が登場する。『石庭』の「ヨシロ」が神戸を散歩しながら旧き良き日本と日本女性のステレオ・タイプを否定したのと同様、「東京」の「ヨシロ」も同じく旧き良き日本と日本女性のステレオ・タイプを否定しつつ「自分が男だったらよかったのに」と発言している⁴⁸。「ヨシロ」という名前は一般的日本人女性の名前には見られないものであり、カザンザキスが「ヨシコ」を聞き間違えた可能性が高いものであるが、「東京」の「ヨシロ」による旧き良き日本と日本女性のステレオ・タイプの否定と「男になりたい」という発言は、多分に『石庭』の「ヨシロ」の人物設定に大きな影響を与えていることは明らかであろう。それ故、「日本旅行記」の描写に従って彼が東京でこのような発言をした女性に本当に会ったのだとして、この女性の名前が「ヨシコ」か或いは「ヨシロ」に近い名前だったのか、「男になりたい」という言葉の持つ形象から川島「ヨシコ」にあやかった名前を「日本旅行記」においても採用したのかどうかは定かではなく、「ヨシロ」の名前が実際川島芳子に直接由来するかどうかを確定することはできない。

次に、作中のヨシロが発した「男になりたい」という発言は、先述のようにカザンザキスの中で日本女性に対するステレオ・タイプの否定からメシア的救済或いは近代化につながる射程を有するものであるが、「男装の麗人」というマス・メディアと小説及び舞台によって作られた川島芳子のイメージに符合するものであり、またヨシロが日本軍のスパイであったという設定に関しても、川島が諜報に携わったとされていることや、また新聞や雑誌などのマス・メデ

⁴⁷ Kazantzaki (1959 : 278)

⁴⁸ Καζαντζάκης (2006 :120 - 123)

ィアに加え小説や舞台の『男装の麗人』などの作品において醸成された彼女のイメージに一致するものである。これに加え、ヨシロが上海のダンスホールで踊っている描写や上海の社交界で踊りながら中国国民党の将官たちにスパイ活動を働いている描写は、川島の実際の活動と『男装の麗人』における描写と共通していよう。さらに、この『石庭』のヨシロの持つ大陸での諜報という形象は、「日本旅行記」のヨシロには一つも見られず、「日本旅行記」の外から導入された形象であることは明白である。

とはいえ、ヨシロがカザンザキスの作品において持つ意味は、名前の近似や彼女の有する属性の一致という表面的な符号によりヨシロのイメージが川島芳子に由来する蓋然性が高いということにとどまらない。前章で論じたように、伊東と川島は満洲国を巡り「新東洋主義」をピボットに結びついていたが、ヨシロの「当面、私たちは最初の義務を達成することになる。食べること！ 食べることよ——私たちは工場を建てて軍艦と大砲を建造し、物質的にも精神的にも力を組織していくわ。アジアを組織する。全アジアを——中国、インドシナ、インド、そしてムスリムたちを。まずは中国から始めよう！」という発言はカザンザキスの理解した「新東洋主義」における東洋の欧米からの独立と日本が中国を救うことによってこの中国が日本を救うという発想にも対応している⁴⁹。

またヨシロは「よく生きて、よく死になさい。心をしっかりもって！」と述べ、自分の命を差し出す形で諜報活動に従事していくが⁵⁰、スタマティウ(1997)は『カザンザキスにおける女性たち』において、『石庭』のヨシロは「死に至るまで戦う象徴」として描かれた人物でもあり、カザンザキスの思想伝達装置として重要であると記述したが⁵¹、これはカザンザキスの理解した日本の「心」と「民族」が特徴とする「不死」にも一致するものであり⁵²、また『神』の救済のために死ぬことによって不死に至る」という観点で『禁欲』的

⁴⁹ Kazantzaki (1959 : 23): 尚、「日本旅行記」のヨシロは「私の祖国には偉大な使命があり、過ぎゆく瞬間は困難ばかりです。そして私は毎日何をしてどこに向かうべきかを知るといふ義務を感じています。責任は大きいのです。——責任とは何ですか？——私たちがアジアを解放することです。全アジア——中国人、タイ人、インド人……。前に進んで、道を切り拓くことです」と述べている(Καζαντζάκης 2006 :120 - 123)。

⁵⁰ Kazantzaki (1959 : 25)

⁵¹ Σταματίου (1997 : 183)

⁵² 福田 (2020 : 9)

な思想に即応している⁵³。この点で、ヨシロが単に作品に異国情緒的な雰囲気を与えるためのみに存在するわけではなく、社会的な面でも思想的な面でも、また小説のプロットに関わる面でも重要な役割を担われていることは明らかであろう。

5. 本稿のまとめ

単なる偶然ではあるが、実在の人物である川島芳子も架空の人物であるヨシロも同じく国民党に捕まって処刑された。この作品『石庭』は、川島処刑の十年程前に描かれた作品ではあるがここに奇妙な「預言的」一致があり、当時のカザンザキスから見ると未来の出来事であり知る由もなかったが、この史実を知る我々には川島芳子とヨシロが尚のこと重なって見えてくる。

ここまで論じたように、カザンザキスが引用した伊東ハンニの「新東洋主義」は実際の伊東ハンニの「新東洋主義」から取られたものであり、『石庭』のヨシロもカザンザキスが無から設定した人物ではなく川島芳子という下敷きがあった。そして彼らはカザンザキスの思想の中で一致する思想を有していたり、彼の思想に適合する形で描写されたりしており、決して異国情緒の醸成の装置として機能しているだけでなく、カザンザキスの思想との相関の中で理解されるべく作中で描写されており、決して「日本旅行記」や『石庭』が彼の哲学や神学の思想とは独立した単なる「外国物」や「物見遊山」としてのみ考えられないことの一つの証左であろう。

参考文献

一次文献

Καζαντζάκης, Νίκος (2006) *Ταξιδεύοντας Ιαπωνία-Κίνα*, Εκδόσεις Καζαντζάκη, Αθήνα.

Kazantzaki, Nikos (1959) *Le Jardin des Rochers*, Plon, Paris.

Kazantzaki, Nikos (1962) *Toda-Raba Moscou a crié*, Plon, Paris.

愛新覺羅顯琦 (2009) 『清朝の王女に生まれて——日中のはざまで』中央公論新社。

⁵³ Γουινελάς, 2008, 80

川島芳子 (2021) 『動乱の蔭に 私の半生記』 中央公論新社.

二次文献

Γουνελάς, Χαράλαμπος (2008) Η πραγματικότητα στον Νίκο Καζαντζάκη: Από τον Πλάτωνα στον Νίτσε, στο *Φιλίλογος*, (131), Σύλλογος Αποφοίτων Φιλοσοφικής Σχολής Αριστοτελείου Πανεπιστημίου Θεσσαλονίκης, Θεσσαλονίκη, σ. 73-82.

Σταματίου, Γιώργος (1997) *Η γυναίκα στη ζωή και στο έργο του Νίκου Καζαντζάκη*, Εκδόσεις Καστανιώτη, Αθήνα.

井上寿一 (2016) 『【増補】アジア主義を問いなおす』 筑摩書房.

岩崎育夫 (2021) 『近代アジアの啓蒙主義』 講談社.

河西善治 (2003) 『昭和の天一坊 伊東ハンニ伝』 論創社.

川崎賢子 (2019) 『もう一人の彼女 李香蘭/山口淑子/シャーリー・ヤマグチ』 岩波書店.

嵯峨隆 (2020) 『アジア主義全史』 筑摩書房.

寺尾紗穂 (2008) 『評伝 川島芳子 男装のエトランゼ』 文藝春秋.

福田耕佑 (2019) 「カザンザキスと「東方」の探求 ——ロシア旅行とロシア文学から受けた文学上の影響——」 東方キリスト教世界研究、『東方キリスト教世界研究』 第3号、pp. 3-34.

福田耕佑 (2020) 「カザンザキス文学における日本描写——「心」、「桜」、「富士山」、「不動心」理解を中心に——」 日本ギリシア語ギリシア文学会、『プロピレア』 第26号、pp. 1-24.

福田耕佑 (2021) 「古代ギリシアと日本との比較を通してみるカザンザキスのギリシア像：「日本旅行記」と「ペロポネソス旅行記」を中心に」 日本ギリシア語ギリシア文学会、『プロピレア』 第27号、pp. 1-30.

村田菜々子 (2022) 「ギリシア人の見た 1935年の日本——ニコス・カザンザキスの眼差し」 東洋大学文学部紀要 史学科篇、『東洋大学文学部紀要』 第47号、pp. 95 - 149.

**Οι παρουσιάσεις του ΊΤΟ Χάννι (1898-1969) και
της ΚΑΟΥΑΣΙΜΑ Γιόσικο (1906-1948)
στα έργα του Νίκου Καζαντζάκη:
μέσω της ανάλυσης των λογοτεχνικών και φιλοσοφικών ρολών τους
στα έργα του**

ΦΟΥΚΟΥΝΤΑ Κόσουκε

Part-time lecturer στο Πανεπιστήμιο Κιότο

Μέσω αυτού του άρθρου προσπαθούμε να δείξουμε τις καταγωγές και τα υπόβαθρα του « Νέου Ανατολισμού » του ΊΤΟ Χάννι στο « Ταξιδεύοντας: Ιαπωνία » και της « Joshiro » στο « Jardin des rochiers ». Κατ' αρχάς εξηγούμε με μερικά ιαπωνικά υλικά τα βιογραφικά στοιχεία του ΊΤΟ Χάννι, ο οποίος ήταν επενδυτής και συγγραφέας και της ΚΑΟΥΑΣΙΜΑ Γιόσικο, η οποία λειτουργεί ως μοντέλο της « Joshiro ». Η ΚΑΟΥΑΣΙΜΑ Γιόσικο, γεννηθείσα ως μια πριγκίπισσα στην Δυναστεία Τσινγκ, έγινε μετά Γιαπωνέζα από υιοθεσία από έναν Ιάπωνα και πιστεύεται ότι αυτή ασχολούνταν με την αναγνώριση ως κατάσκοπος των ιαπωνικών ένοπλων δυνάμεων για την επανάκτηση της Δυναστείας Τσινγκ. Ύστερα δείχνουμε ποιο ρόλο έχουν στα καζαντζακικά έργα ο « Νέος Ανατολισμός » του ΊΤΟ Χάννι και η « Joshiro » και ποιες σχέσεις έχουν με τη καζαντζακική φιλοσοφία και λογοτεχνία, συμπεριλαμβάνοντας τις σκέψεις του στην « Ασκητική ».